１０月１８日（日）主日礼拝レジュメ
「置かれたところで仕えなさい」　使徒の働き８章３６～４０節

２章３７節「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか」と言いましたが、それに対してペテロは、「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」と言いました。ピリポがエチオピア人の反応を見ながら、悔い改めのしるしとしてのバプテスマについて語ったのかもしれない。３８節でピリポがエチオピアの宦官にバプテスマを授けている。ここからは、浸礼だったのか滴礼だったのかは分からない。日本福音キリスト教会連合は浸礼も滴礼も認めている。また紀元前一世紀後期もしくは二世紀前半に記されたとされる教会の手引き書であるディダケーには、「洗礼については、次のように洗礼を授けなさい。流れる水によって、父と子と聖霊の名をもって洗礼を授けなさい。流れる水がない場合には、他の水で洗礼を授けなさい。冷たい水でできない場合には温かい水でなさい。どちらの水もない場合には、頭に水を三度、父と子と聖霊の名をもって注ぎなさい。」とある。ディダケーの著者は、洗礼に三位一体の式文を用いることについては厳格であったが、洗礼を施す方法については柔軟であったことが分かる。

３９節に「主の霊がピリポを連れ去られた。」とあり、ピリポがエチオピアの宦官にイエスの福音を宣べ伝えるとの務めを果たし終えたので、今度は主の霊、すなわち聖霊がピリポを別の働きへと導かれたということを意味している。「宦官はもはやピリポを見ることはなかったが」とあるように、人に依存する信仰ではなく、神ご自身に頼る信仰、もっと言えば賜物として与えられている聖霊によって導かれる信仰、その後に「喜びながら帰って行った」とありますが、聖霊によって与えられる喜びに満たされた歩みをすることが信仰者の歩みだと言える。洗礼を受けることで賜物として与えられた聖霊を

通しての喜びとは具体的にどのようなものなのだろうか。一つは、神との交わり、キリストとの愛の交わりの中へ入れられた喜び。それとともに私たちが神を知り、神が私たちを知っていてくださる喜びもある。神は自分の存在を認めて、常に愛のことばを語り続け、私のことを喜んでくださる、そこに御霊の喜び、キリスト者だけが与えられる喜び、信仰による喜びがあるのだろう。

巻末地図１２を見ますと、そこにピリポの宣教というのが一番上にある。

① 使徒の働き２１章８節に「あの七人の一人である伝道者ピリポ」が出てくる。ここで言われているあの七人とは、６章５節で食卓に仕えるために選ばれたステパノを始めとする七人のことを指している。カイサリアに移った後は、ずっとそこにいて、その地で主の宣教に励んでいたのだろう。

② ９節では「この人には、預言をする未婚の娘が四人いた」とあり、娘たちとともに、それぞれの賜物を用いて主に仕えていたことが分かる。外に向かって聖霊の導きの中で積極的に主の福音を語るとともに、しっかりと家庭を治めて、家族をあげて主に仕えていた姿がそこにある。

伝道者ピリポは常に主の霊、聖霊の導きに常に従う人だった。また、自分ではなく、主を宣べ伝える、イエスの福音を証しする、自分の栄光ではなく、主の栄光が現れることを求める。私たちが、主の御前で願うべきことは、自分ではなく、ただキリストの栄光が現れ、主が崇められること。それは、ピリポのようにただ聖霊の導きに従う時にのみ可能となる。